

インターネット社会どこまで

＝マスコミ人座談会＝

大島 幸夫

(昭和31年) 毎日新聞

片貝 憲二

(昭和33年) フジテレビ

橋爪 大三郎

(昭和42年) 東工大教授

菅 沼 栄一郎

(昭和49年) 朝日新聞
アエラ編集部

司会 逢坂 剛

(中 浩 正)

(昭和37年) 作家(博報堂)

陪席

矢島 幹事長 (昭20-4)

風間 副幹事長・会報担当(昭28)

伊藤 常任幹事 (昭27)

香川 常任幹事 (昭34)

進藤 事務局長 (昭30)

平成九年二月五日 於如水会館

司会 情報化社会という言葉ができてもう十何年になりますか。死語とまではいいませんが、すっかり古くなってしまいました。情報化がどんどん進んで、まさに二一世紀を迎える今、急激に加速された感じがしますね。

コンピューターの普及から、さらにこの一年ほどの間に、インターネットなどというシステムができたりにして、私達の生活そのものが変わってきました。開成のOBだけではなく、日本人全体にとって非常に興味深い分野だ、と思います。今日お集まりの方々にそれぞれご意見、お考えをお聞かせ頂いて、二一世紀に向けてどうすれば良いのか、というところまで話がイケばいい、と思うのですが。

一応、私三七年卒の中(逢坂)が進行役を仰せつかっておりますので、そういう形で進めさせていただきます。今日はまずお一人ずつ、昨今のインターネットを含めた情報化社会についての認識、これから二一世紀に向けてどうなっていくのかについて、お考えをお聞きしたいと思います。突然ふっちゃってすみませんが、四二年卒の橋爪さんから、いかがでしょうか。お仕事でパソコンなどをお使いだと思いますが。

情報が安く大量に／大変化の始まり

橋爪 たしかに今ご紹介があったように、インターネットなど情報化社会の動きが九〇年に入ってから、急に進んで、とくにここ一、二年でいっそう拍車がかかっているという感じがします。

この大きな変化の理由を考えると、情報が安く、大量に、すみやかに至る所に伝わるという、「伝達の革命」ですね。伝わり方が革命的に変わっているわけで、伝達される内容の方は、かならずしも変わっているとは言えない面もある。しかし伝わり方が変わることによって、情報が安く大量にバラまかれるという大変化が始まったところなんです。これがどういふふうに進んでいくのか、私は社会学が専門なのですが、興味津津というところです。

新人記者に教えを乞う

司会 ウインドウズとか、私もいろいろ言葉だけは聞くんですが、だいたい五十歳を過ぎますと、何だか良く分からない、取っ付きにくいということが強く出てくるわけですね。その代表として、三二年卒の大島さんに昨今の事情について感慨、をお聞かせ願いますか。

大島 ふられても困っちゃうんですが。

司会 その困ったところを、お願いします。(笑い)

大島 正直いってパソコンを使っていないし、ワープロは会社で強制的にやらされているので一応は打っていますが、あまり知識はないんです。このテーマを頂いた時に、ちょっと向きじゃないんじゃないかという感じがあって、とりあえずオプザーバーで、というつもりで出てきたんです。

司会 皆さん似たようなものだ、と思いますよ。

大島 昔は古手の記者が、記事の書き方にせよ取材の切り口にせよ教えたでしょ。経験が、一つの誇りにつながっていたわけですね。今は、ワープロの使い方は新人記者の方がはるかに進んでいるから、我々が教えを乞うというかね。メディアの革命が、社内の日本的な序列の弊害みたいなものを崩していく効果は、僕なんかは中にいて感じますね。

司会 逆にいうと、インターネットも含めて、パソコンが今の仕事や生活になくはならないものなのか、あるいはなくても間に合うものなのか。その点はいかがですか。

大島 記事を出す体制は全部ワープロ出稿になっていきますので、いやでもワープロを打たないと仕事になりません。ただ強制感はありません。海外からもワープロ通信で送られるのですが、そこまでのノウハウを僕はまだ持っていませんから、少し不便をかこつという事はあります。

アメリカは一〇年進んでいる

司会 なるほど。片貝さんはいかがですか、会社でも、かなりパソコンを導入されている、と思えますが。

片貝 たしかにテレビ局ですから皆さん進んでいます。でも、あまりパソコンに縁のない人も半分くらいいます。中高年はどうしても乗り遅れがちですが、技術系の人は、ツール（道具）のように使いこなしていますね。私もやらなければいけないだけでも、せいぜいワープロ程度で、パソコンを使ってグラフを作ったり、データ分析までとても出来ない中高年の一人です。

ただ経験でいうと、私は九二年から九五年まで三年間アメリカにいて、つい一年半前に帰ってきた。九二年は、クリントンの民主党政権が一二年ぶりにできて、若々しいゴア副大統領と組んで、「情報スーパーハイウェイ」という構想を打ち出しました。クリントン大統領は今日行った一般教書演説のなかで、米国で学ぶ小学生が全部パソコンを使えるようにするという構想を出しました。実際に見ていた立場としては、アメリカは本当に進んでますよね。情報スーパーハイウェイ構想は光ファイバーを使って全米をネットワーク化しようという考えですが、そういう意味では日本

より一〇年は進んでいるんじゃないかと思えます。

一昨年の夏に帰国してしばらく見ていましたら、日本でもインターネットが急速に普及して誰でも使うようになって来た。日本も段々アメリカ化しているのかなという思いでいました。

司会 菅沼さんはいま、書記役としてメモをとるのに忙しいんですが、四九年卒で一番若くていらして、さほどそういうものに抵抗のない世代ではないかと思うんですが、コンピューターとの付き合いはいかがですか。

一〇年後には新聞がなくなる？

菅沼 大変期待にそむいて申し訳ないんですが、私は「化石人間」の最後の世代にあたるんです。ちょうど私の二年から三年下がワープロやインターネットを駆使している世代なんです。「鉛筆一本で身を立てるのが新聞記者の人生だ」とイキがっていたんですが、ある日突然に「ワープロ出稿以外の原稿は受け取らない」との会社のお達しが出て、泣く泣くキーボードを叩き始めたわけです。

会社で背中合わせの席にいる若い記者が、カチャカチャとやってる。「ニューヨークのXXというジャズバーで明日、こんなコンサートがあるのか」とリアルタイムの案内をのぞいたと思えば、米國務省の外交文書をあつという間に引つ張り出しちゃう。もう、別世界というか宇宙人ですよ、彼らは。

こんなことがどんどん進むと、一〇年後には新聞なんかなくなっちゃうんじゃないかという思いにもなります。通勤電車の吊り革につかまって新聞を読むサラリーマンの姿がいつまで見られるのか。私は定年までまだ二〇年近くあるんですが、とても不安になるんですね。

司会 橋爪さんは社会学がご専門ですが、仕事でコンピューターを使いこなしておられるんでしょう。

会議はメールで

橋爪 「こなす」までは行きませんが、会議などはなるべくメールに置き換えてやろう、ということをやっていますので、足並をそろえて行かざるをえない。大学全体でも部局ごとにも、学内LAN（地域情報通信網）というのがある、コンピューターが繋がっている。ここ一二年で急に進んできました。

私自身の経験で言うと、七〇年代の終わりからある程度の文章を書くようになったんですけども、その頃にはTOSWORDも出ていない、ワープロ以前の時代でした。タ



イプライターがあっても英語しか打てない。その時私が考えたのは、鉛筆とトレース紙ですね。書いたり消したりできるのも一種の編集機能がある。コピーのコストを節約するために、原稿用紙五枚、六枚分をトレース紙一枚に書いて行くわけです。最後のところで、このパラグラフはもつと前にあつた方がよかつたな、と思い付いてもどうしようもない。全部消すしかない。何とか自在に編集できないかなあと考えながら書いていて、そこへワープロが出て来た。初めは百万円くらいで、なかなか手が届かなかつたんですが、八五年に四十万円のを買った。それから書くのが楽になつて、沢山書いても疲れなくなりました。

書く道具としてのワープロは、とても素晴らしかったと思います。八六年には、せっかくワープロで書いたのこれをそのまま入稿できたらどんなにいいだろうと思つて本屋さんに言ったのですけれど、まだその態勢がなくて、そんなことをするとコストがかかるからやめてくれと言われて。でもそのうち絶対にみなワープロ出稿になるから、これは最初のテストケースでは非やつてくれと、押問答をしてやつと認めてもらつたのです。

司会 フロッピーですか。

橋爪 フロッピー入稿です。フロッピー入稿しますと、

橋爪 そうです、そうそう。

司会 それをやつたら、一ヶ月くらいでキーボードを見ずに、打てるようになりました。後はスピードが上る一方でしたね。あれは最初が肝心なんです。今ではもうワープロがないと、小説が書けなくなつちやいましたね。キーボードを目で見ると、打てないんです。指は覚えていたんだけれども、目が覚えてないんです。そこまでいけば、ワープロを一応使いこなしている、といつていいような気がします。自画自賛ですが。(笑い)

今橋爪さんがおっしゃつたように、ファックスができたものだから、ワープロとファックスを連動させると、ハードコピーを出さなくても、そのまま原稿を送ることができるよう。そういうメリットは確かにあるんですが、私はちよつと疑問というのか、ハツと気がついてみると、そういう機械を通じて通信をすることで、人と人との触れ合いというものも、なくなつちやうんですね。昔は編集者が原稿を取りに来て、面白いとかつまらないとか意見を交換する、コミュニケーションがありました。今はもう、ファックスで原稿の発注があり、ファックスで原稿を送る。つまり、まったく顔を見ないで仕事が終わつちやう、ということがしばしばあるんですね。

活字の拾いミスがありませんから、校正がとっても楽になります。校正にあたる作業は書いている間にやつて、渡した段階では完成原稿。後はもう何も見ないというスタイルに変わったんですね。今はもうそれが普通になりました。

ファックスの普及も大きい。どんなに遠方にいても、版元にファックスを送れば、原稿が入られる。フロッピー入稿だと、フロッピーの実物を届けなければいけないですけど、電子メールで送ればどんなに厚い本の原稿でも一発という時代です。次々に技術革新が進みます。何か情報を発信する人にとって、その行先が本であれ、雑誌の原稿であれ、手紙であれ、非常に楽に書けるようになった、これがこの一〇年間の大きな変化だと思います。

ワープロがないと小説書けない

司会 なるほど。それは大きなメリットの一つですね、たしかに。

橋爪 書き手にとつて、こんなにいいことないです。

司会 実は私も小説を書くようになって、もうすでに二、三年ワープロを使っています。私も文科系ですから、英文タイプなんかやつたことはないんだけど、最初が肝心だといわれまして、ブライントタッチを覚えてたんです。

はたして、これでいいのかなあという疑問を、非常に強く感じているんですね。確かに、機械のおかげで便利になつているんだけど、人間的要素が希薄になつてしまつた。そういうことに対して、危機感はありませんか。大島さんはいかがですか。

コミュニケーションがなくなった

大島 そうですね、ワープロを使い始めたからそうなのか、違うところに原因があるのかちよつと速断できないけれども、ワープロそのものも含めて時代の表現ですから。手書きで書いていた頃の原稿とワープロを使い始めてからの原稿とやはり少し違つてきたのかも知れないなあと感じる時はありますね。

文体も変わつてきてるのではないかと思います。手書きじゃなく印字ですからね。印字の冷たさというのは印象としてあるけれども読者は手書きの原稿を読むわけじゃないので、やつぱり書き手のヒュマニテイというか人間味、人柄の問題だと思ひます。

司会 ワープロを単なる筆記用具だ、と思えばいいのかもしれない。万年筆ができた時に、明治の人が、筆でなければ精神がこもらん、みたいなことを言つたという話も

ありますね。それと同じで道具として考えれば、あまり深刻に考えることはないと思います。片貝さんは、いかがですか。

「夜討ち朝駆け」は昔話

片貝 今同じようなことを考えていたのですが、私はフジテレビに入社してから二〇年位報道をやったんですけど。夜討ち朝駆けをやって、まさに足と体を使って取材してきたつもりです。自分なりにマイクを握ってテレビに表現してきたつもりですが、今の若い記者の皆さんを見るとどうも便利すぎるんですね。というのは、世界各地へ行ってもプラグを差し込めば、日本の国内からの新聞情報でも、通信社情報でも、あるいは英語の速報でも全部端末に出てきちゃうんですね。

大島さんのおっしゃったビューマンコミュニケーションというか、そういうものが本当になくなっていくんですね。海外特派員は端末を見てその原稿で判断してしまうのではないか、あるいは国内でも昔風に言えば夜討ち朝駆けをしないで表現してしまう傾向も、最近の若い記者を見ているとなきにもあらずです。そこが、ちょっと反省しなければいけないと思いますし、基本的なジャーナリストと

しての資質を問われるようなことをしちやいけないんじゃないかなと思うんです。

司会 そうやって、人間的接触がおろそかになってくると、人情の機微なんていうものが出てこない。一かゼロかみたいなことになって、機微が伝わってこないんですね。情報とはそれだけのものかという気もして、まあ、時代の流れがもちろんありますから、一概に悪いとはいわないんですけど、何かどうも納得できないところがあるんです。そんなに世の中が便利になっていいのか、世の中もつと不便な方がいいんじゃないか、という気さえしてくるんですね。「アエラ」の菅沼さんはどう思いますか。

火事だ！パソコンに飛びつく記者

菅沼 片貝先輩のお話で思い出しましたんですけど、新聞社では入社すると、皆支局へ配属されます。最近の支局の記者のなかには、火事だ、交通事故だという第一報が入ると、いきなりパソコンに飛び付くという人種が出て来ているというんですね。現場とにかく飛んで行って、見て、臭いをかいて、写真を撮ってというのが、基本なのに。データベースにかじりついて、五人死んだ火事は過去一〇年間

に何件目か、と調べている。そのうち火は消えちゃうんですが、そういう記者が出て来た。一概には否定できないんですが。締切まであと三十分という時に、データを調べる

記者は必要なんです。一年生がやる仕事ではない。もうひとつ、片貝先輩がおっしゃったように、国際ニュースの現場では、データをパソコンから取って間に合わせてしまうことはありうると思いますが、それでも、発信するのは自分しかない、という事態は地球上のどこにもあることです。いま、自分の目の前で地震が起きた。家がいくつもつぶれている。百人くらい死んでいるんじゃないか、という場合、当然ながらパソコンをいくら叩いても何も出てこない。

この話は、伝達機能がいくら革命的に変わっても、新聞は生き残る、という議論につながってくると思う。何を伝えるか、というソフトはやはり人間の手で作らなければならない。情報を集めて、それを料理して、どうやって発信するかという第一義的のところ。そのための、最も優秀な人材を持ち機能を持つのはやはり新聞だろう。新聞は更に磨きをかけなければいけんのだぞ、というのが今年の朝日新聞の編集局長の年頭の挨拶だったわけなんです。

情報の質が落ちる／新聞埋もれる

橋爪 そうかもしれません、そんなに簡単ではないと思いますよ。

確かに優れた書き手は残って、その技術を伝えてゆくでしょう。しかし、情報化社会は、昔のように手書きの時代には例えば一〇万人しかまとめた文章が書けなかったとすると、それが百万人、一千万人になって、誰でも書ける時代になるといえることなのです。また、データベースが整備されていきますから、昔はよほど博学の人でなければ知らなかったようなことを今は誰でも調べることができる。プロとよく似た情報を発信できるようになります。

発信される情報の平均点は確実に下がると思います。どうでもいいもの、信憑性のないもの、そういうガラクタ情報があとからあとから生み出されて、その中にたとえ朝日の生え抜きの書き手の皆さんが送り出すような素晴らしい情報も、区別がつかないまま埋もれていく。こういう状態が情報化社会なんじゃないでしょうか。

新聞や地上波のテレビ局は送信のコストがかかって、おそれと誰でも使えない。新聞の五センチ×五センチのスペースに名前が載るということは大変なことです。だから

人数が限られていたんですけど、もし、それがホームページみたいなものなら、誰でもアクセスできるうえに、誰にでも手軽に送信者となることができます。

テレビにも似たような変化がおこる。地上波はネットワークに新しくはいけない、キーステーションがなくなっちゃいけない、十二チャンネルしか取れない。こういうことで、許認可があったり系列ができたりするんですけど、ケーブルテレビで百チャンネルだ、四百チャンネルだという時代になれば、簡単にソフトを流すことができる。メディアの送信コストが劇的に下がっていくわけですね。ということとは、情報の質の劣化が進んでいくという、恐るべき状態が今起こりつつあるわけです。

司会 二一世紀の新聞、テレビというのはどうなると思いますか。

二一世紀に新聞、テレビはなくなる

橋爪 新聞、テレビはなくなると思いますよ。

司会 そう、あっさり言われても……。 (笑い) テレビもなくなっちゃうんですか。

橋爪 テレビの受像器はありますが、まあ、ブラウン管みたいなものは多分残るかもしれませんが、壁掛けにな

クリックして。重油流出事故については、こっちの解説が面白いとか、ペルーの特ダネはこちらの方がありそうだというふうなことで、どれを購読しても一ヶ月三千何百円というふうのではなくて、その場での一つ一つの記事についての競争が始まると思うんですね。

やはり「幕の内弁当」欲しい

司会 私などは、一覧性とでもいいますか、スピードが大切なんですよ。画面をクリックして、限られたスペースで見るといえるのは、まどろっこしい。だから、新聞は絶対なくならない、と思ってますけどね。

菅沼 「一覧性」という側面が重要だという点は、僕も同感です。新聞というのは、昨日という一日はこんな一日だったんですよと、一面から社会面の最後のマンガの載っているところまでを使って表現する、ダイジェストです。個別の情報を、画面からチョイスして見たい人は別として、トータルなセットとしての「幕の内弁当」がほしい人はかなり多いはず。こっちにタマゴ焼きがあり、あつちにゴボウがある、という「バラエティー」への欲求はかなり最後まで残るはずだと思うんです。

司会 二〇歳代の人たちには、テレビ画面でクリックし

るかも知れませんが、地上波はなくなると思います。

菅沼 情報の質の劣化がものすごいスピードで進んでいくというのは同感できるんですが、その中にも、色々な情報があるはずですが、こだわりますが、朝日新聞が発信する情報がある。プリントメディアだろうが、インターネットに乗せようが、これを消費者が選んで買うという形になる。もちろん質の向上が非常に厳しく迫られることになりすが、あるいはパーフェクトTVのように、有料で契約をして、この情報を買う。消費者はどんな情報を選ぶかといえば、個人的な情報はホームページを覗けばいい。しかし、大量のガラクタ情報のなかで、どれを信じて明日の行動を決めればいいのか、中期的なビジネスの行動指針を決めるのか、というところで、やはり信用あるブランドの情報を買うことになるんじゃないでしょうか。その意味で、情報を発信する機関、企業は確実に残っていくはずだと思う。

司会 紙がなくなる、というのは、その情報をテレビ画面で見ると、という形になるんですかね。

菅沼 そうですね。だからおそらく朝日新聞をとるか、毎日新聞をとるかという話ではなくて、テレビあるいはパソコンの画面の中で、この記事は朝日の方がいい、こちらは毎日の方がいいというようなことで、チョコチョコと

て新聞記事を見る、ということに抵抗がないのかもしれない。我々の世代には、とてもついていけないそうもない。

菅沼 新聞を読まない「無購読層」は、その世代を中心に既に広がっています。新聞のトータルな購読部数が数年前から頭打ちになっています。読売新聞は一千万部以上あるんですが、朝日は八三〇万くらい。なのに、朝日は、二千年の目標として、九百万部を掲げることさえできない。新聞購読者は飽和状態に達してしまっ、大きさが決まった一つのパイを、地方紙を含めたいくつかの新聞社が食い合っている状況です。若い人たちが新聞から、プリントメディアから離れていることが最大の原因です。

新聞が内部崩壊する危険

司会 大島さんは、新聞の行く末についてどうお考えですか。今のような形で残るのか、それともまったく変わるのか。同じ新聞人として、しかも菅沼さんとは十八年ほど年代が違うわけですが。

大島 新聞の行く末という大きなテーマは別として、片貝さんや菅沼さんがいつかいた、情報を現場に行かないで取ってしまうという習性があったりまえになつてくると、新聞の内部から崩壊していく危険はあると思う。僕も、各部

渡り歩いたし、色々な所へ取材に行きましたが、インターネットからは匂いとか、音、それから闇だとか、光だとか、身を包む感動、五感に訴えるものは伝わってこない。ジャーナリズムというのは単に目で見た、あるいは活字で見た情報ではなくて、五感で受けとる感じの総体が情報なのです。

司会 そうですね。それは分かりますね、私も。

大島 その総体が情報である以上、先程菅沼さんが言っていた、火事だといってパソコンに飛び付く記者が増えて



大島 幸夫氏

きてしまうと、きわめて危険な状況になる。火事の現場に行つて知る人間の悲しみだとか、喜びだとか、叫びだとか、そういう人間ドラマを感じ取つてこそ、情報の中味というのが濃くなって、人間的になってくるわけですが。

その五感情報のシステムが矮小化されたり消えていくと、新聞社というのは内部から崩壊して商社みたいになってしまふ。やはり新聞記者の感受性、きざっぱい言い方で言う

と、正義感だとかロマンチズムだとか、あまりコンピュータとか機械の中に表現されにくい情感というものが人間の中にあるでしょ。そういうジャーナリズムのソフトな部分を大切にして行ったら新聞は形態が変わっても情報のみずみずしさは残っていくにちがいはないという気がします。

地上波も減びる？

司会 さきほどの橋爪さんから二一世紀には地上波はなくなるのだという、大胆な発言がありましたけれど（笑い）、片貝さんはどうお考えですか。

片貝 減びゆく地上波としてですね、一言申し上げると。（笑い）

司会 弔辞をどうぞ。（笑い）

片貝 たしかに最近の新聞でも雑誌でも見出しはそうなんですよ。地上波はもう生き残れないとか、CSデジタルの時代だとか、見出しが躍ってますよね。その見出しを見ていて感ずるのは、要するに日本のこれまでのテレビジョンというのはNHKも民放も郵政省の厚い規制というか、防護壁というか、そういう温室のなかでこの四〇年、ぬくぬくとやってきた。けれども、もう、あなたがた地上波の

時代じゃ無くなるよ。多チャンネル、三百チャンネル、五百チャンネルが増えてくれば、誰でも、番組を供給できる会社を創つて、トランスポンダ（テレビの送受信回線）というんですけれど、トラポン一本買えば、年間一億位でテレビ産業に入つていける、簡単に放送事業者としてやっていけることになる。

確かにそのとおりになると思います。来年は三百何チャンネルといつてますから、今年もすでにスタートしているパーフェクトテレビと、今年の秋にスタートするディレクTVと来年春スタートするJ・S・K・Y・Bですね。三つ合



片貝 憲二氏

わせると三百チャンネル越えるわけです。ただ、本当に三百チャンネルが視聴者の皆さんのお手元に届くかといえ、最近もう少し議論が進ん

できまして、いわゆるソフトをどういうふう提供するか、コンテンツをどうするかという問題が出てきた。チャンネルは増えた、いわゆるハードは増えたけれどそこに乗せるべきソフトが無い。

三百チャンネル埋める番組は？

片貝 ソフトをどうするかというと、アメリカのテレビと日本のテレビは随分違うんですよ。つまり日本というのは番組でもアニメでも二次利用、三次利用する権利が無いんです。ところがアメリカは始めからオールライツ（全著作権所有）で買い取る方法ですから非常に二次利用がイージーなんです。

日本ではそこまで行っていないものですから、本当にその三百チャンネルを埋めるだけのソフト、プログラムがあるかどうかということになると、実はそれほどないんです。だから、仮に二百チャンネルまで揃ったとして、皆さんどのチャンネルを選びますか、ベーシックなものに入会金だけで、月々二千元位なら払えますが、それ以上欲しい情報というのはやはり一チャンネルにつき千円とか千五百円とか三千円とか払わないと、その情報が入ってこないわけですよ。

今の日本の視聴者の世帯が、そういう情報に対して可処分所得の中からいくらかけるかというと、多分平均して月収の五%以下だと思っんですよ。新聞もテレビも雑誌も週刊誌も含めて、情報に対するコストとして払えるのは多分、

二万円以内だと思っんです。そうすると、そんなに沢山のチャンネルは見られないんです。そこで、視聴者による番組の選別が厳しくなって、優秀なソフトを提供するチャンネルだけがサバイバルしていくんじゃないだろうか。その中で地上波がどのように生き残るかなあと思っんですけれどもね。ちよつと長くなつてすみません。

番組の「質」にも原因が

司会 いえいえ。地上波がなくなるかどうか知りませんが、仮になくなる恐れがあるとすれば、CSとかそういうものが出て来たことのほかにも、別の要因があると思っます。例えば、今の番組構成はかなり娯楽性が強くなつちやつていくでしょう。それで、タレントが内輪でギャグやア騒ぐだけで番組ができていたりする。要するに我々の世代とか、あるいは知的関心の高い層に、地上波を見る機会や意欲が、失われてきている。そんなことから、地上波にはやや危機感を持つてゐるんです。もっとも広告会社の立場からすると、あまりそういうことは言えないのですけれども。

私は仕事の関係もあつて、パーフェクトTVなんかを入れて、チャンネルをたくさん確保しています。もちろん、全

れだけ持つてゐるかということに、事実上なつてしまふのです。

その行き着くところは、今まで生まれた素晴らしいソフトを全部ストックしていて、それをオンデマンド、見たい人に即届けるといふ形が、究極だと思っます。

映画もカラオケ方式で

橋爪 このやり方はカラオケなどで既に実現されている



橋爪大三郎氏

わけなんですけれども、機械の本体をそれぞれの部屋に置くんじゃなくて端末だけおいて、センターデータにストックしておく。注文をして

番号を入れると、三分間程でセンターからすぐ届くわけですよ。一方、ノンフィクション系の方は情報の確度、信頼性だと思っんです。今まで地上波のテレビや新聞は何をしていいかという、それは編集だと思っんです。この新聞に載つていけば嘘ではないよ、このテレビは皆が見るんだから

部は見切れないんですけれども。お金さえはらえば自分が今まで見られなかった、例えばランドルフ・スコットの西部劇を見ることもできるようになる。これは楽しい。ただ、何でも自分が欲しいと思っものが入る世の中が、はたして幸せなのかどうか。最近年とつたせい、疑問に思っことがあるんです。私が育つた昭和二〇年代は、みんなあつてもなかなか手に入らない時代でしたが、欲しいものが豊かになつて、お金さえ払えば何でも買つて貰える。それがはたして、いいのかどうか。人間の欲望にはきりが無いわけですから、何でも欲しい物が手に入るようになった時、世の中はどうなつちやうのか。そのあたりが非常に不安というか、心配になるんです。

橋爪 ソフトには二種類あると思っんです。一つはフィクション系。もう一つはノンフィクション系。で、フィクション系というのは、楽しむために自分が見たいものを見る、という考え方で出来てゐるわけです。そうすると、コストをかけていいものを作つて皆が見るといふのが合理的なわけで、コストをかけない、いい加減なものも見ません。その技術を持つてゐるのは昔はフランス、ドイツでしたが、今はハリウッドだ。アメリカ映画のストックをど

あなたも見た方がいいよ、と編集した結果を送り届ける。時間も限られてゐる、スペースも限られてゐる。さつき一覧性ということが出ましたけれども、要するに皆がみるに値するものを数ある情報の中からチョイスしてくれるわけです。ひと昔前までは情報が少ないですから、マスメディアに載るものだけが情報で、マスメディアに載らないのはどうでもよかつたのですけれど、今は情報化時代ですから、情報はその百倍も千倍もあるわけです。ただ、それでは皆が混乱しますから、信頼性が欲しい。これさえ見たいればいいんだ、これさえ知つていけばいいんだという、そういう信頼性のブランドが欲しいのだと思っ。そういう形で、テレビとか新聞は形を変えて生き残つていくのではないかと。地上波の番組を送り届けるとか、紙に印刷して配るとかいうのではなく、編集された、国民だつたらこの程度のことを知つておいて下さいねというパッケージ商品をですね、ソフトとして送り届けるということ。だから業態としては、いまの新聞やテレビのやつてゐることに似てくると思っます。これがノンフィクション系の情報産業のあり方だと思っます。

作家は「お払い箱」?

司会 私は個人的には、新聞も地上波もなくならないし、なくなつて欲しくないと思います。ただ小説なんていう形態は、多分もつと早く駄目になつて、作家という仕事ができなくなるんじゃないか、という気がします。辛気臭い小説を読むよりも、テレビゲームなんかの方が手軽に楽しめる。作家という商売は、二一世紀にはなくなるんじゃないか、という危惧もあるんですよ。

橋爪 作家の中に、小説の最初の一〇頁ぐらいをインターネットのホームページに載せてあつて、ここから先をお読みになりたい方は書店で買い求めください、というのがありますよ。

司会 あるみたいですね。何かちよつと、あざといやり方だと思えますけどね(笑)。予告編だけ見せてね。でも、確かに時代の流れから、そうなるかもしれません。

片貝 どうですか。本を読まなくなっている、新聞を読まなくなっているとおっしゃったんですが、そういう傾向はありませんか。

司会 ええ、若い人達の間では相対的に、本は読まれなくなつてきていると思います。いわゆるベストセラーの出方が、このところ間遠になつてますしね。そしてフィクションよりも、例えば「神々の指紋」とか、ああいうノンフィク

ション系のものが、はるかに売れています。その一方で、ご存知でないかも知れませんが、京極夏彦というまだ三〇ちよつと過ぎなんだけれども、凄腕知識と教養を持った作家がいて、こんな分厚い弁当箱みたいな本を出しているんです。妖怪の話とか、ややオカルト的な物語なんです。これが若い人達の間で何十万部も売れているんですよ。だからいちがいに、若い人が活字を読まなくなっている、とはいえないような気もする。その辺が、全くデータがないものですから、非常に混乱するところなんです。

野球やラグビーに専門化

片貝 それはさっき出たCSデジタルの多チャンネルの共通している部分もありますね。二百チャンネル、三百チャンネルになりますと、一つのチャンネルはもの凄く専門化していくわけです。例えばスポーツの中でも野球だけのチャンネルとかラグビーだけとか、専門化してくるでしょう。一つのチャンネルがそうなつていくと、我々が良く言うんですけれど五万の視聴者がいれば成立する、十万もいなくていいのです。

今おっしゃった本は多分そういう人数の読者がいるんだ

から、社にかかつてきた電話で、必要なものは携帯電話に転送してもらつて聞くとか、その連絡が必要にせまられて持っているのですけどね。

司会 電車の中で鳴り出したりして、格好悪いことありますよね。橋爪さんは携帯電話お持ちですか。

橋爪 持ってますけれども。まあ、インターネットに関して言うと、理工系ではもう必須で、あれが無ければ生きてゆけない。スタッフ、学生も含めて全部アドレスを持っていて、お互いに連絡し、レポートを出したりとか、完全に研究・教育環境の一部ですね。四、五年前からそういう状態になっています。

京極夏彦の話に戻りますけれど、東工大にもファンの人が出て、彼の小説を山積みにして持って来て読め読めちよつと読んだんです。あれは四〇〜五〇万部出ている、かなりメジャーだと思います。音楽が一番典型的だと思うんですけども、若い人の場合は、皆マイナーなものを聴いて、他の人間と区別をすること、自分を確認するというスタイルがあるわけです。安室奈美恵とかいうのは小中学生の聴くものであつて、その後高校生になると分かれていくんですね。クラスの中で、一人か二人しか聴いていないようなものを聴く。好みが一人ひとり違うんですね。私達

片貝 だけどそういう専門化したチャンネルじゃなくて、例えば芸能も見たいよ、スポーツも見たいよとなると、地上波ということになるんですよ。そういう意味では地上波はエンターテイメントとかノンフィクションとか結構提供できるのではないかと思えますけど。

司会 いわゆる情報機器も、あれば便利だけれどなくてもいいよ、というものと、これはどうしてもなくちゃならない、というものと、いろいろグレードがあると思うんですね。例えばファックスとか、ワープロとかはもうなくてはならない機械に入っている。私の感じでは、インターネットとか、さっき大島さんが使っておられた携帯電話なんかは、あれば便利かもしれませんが、なくてもいいんじゃないか、という気がするわけです。

大島 僕の場合は外を回遊するような仕事をしています

の若い頃は、皆、舟木一夫とか何だとか、ビッグネームを皆聴いていたんですけど、皆が聴くというスタイルがもうないんです。

マイナーを好む若者

橋爪 雑誌に表れています。コンビニなんかに行くときメジャーの雑誌しか置いてないけれど、書店の雑誌売り場に行くときあらゆる雑誌があつて、大体三万部からせいぜい十萬部というオーダーですけど、読者が完全にセグメントされています。人間も「何々系」というふうに分類されていて、例えば音楽系とか、運動系とか、ホビー系だとか、というふうに系列になつていっているんです。それは、我々から見るとマニアの世界なんですけど、今や全員がマニアなんです。どうしてかという、やはり地上波とかテレビとか、マスメディアをおじいさんもおばあさんも家族揃つて見ましようというのに対する強烈な拒否反応がある。だけど、ほかの誰かと同じものを聴きたいという気持も一方である。そうすると、マイナーなメディアの中に潜り込んでいくんですね。

ケーブルテレビの二百というのがちょうどいい数で、雑誌の数によく似ていると思います。その中でもオープンチャネル

お隣同士で会話が消える

司会 なるほどね。何だか、そういう人たちをゲストに呼んでこないと、我々オジさん達がいろいろ言つても、始まらないような気がしますね。(一同笑い)

菅沼 いまの話にも関係あるんですが、インターネットが人間関係にどんな影響を及ぼして行くのか、には私も大変興味があります。是非橋爪先輩にお聞きしたいんですが、会社で隣り合った席同士でも、パソコンでこちよこちよと連絡をしてしまうので、一日中まるきり会話をしない人が出てきている。そういうパターンの会話に慣れちゃうと、顔を見ながら話をするのが気詰まりになつてしまう。会社の帰りに一杯やろう、なんてもちろん冗談じゃない。

一方で、家へ帰ってきて自分のボックスにメールがひとつも来ていないと、落ち込んじゃう。留守番電話やポケベ

ヤンネルがあつて、そこは皆が視る。多分そういうところ、天気予報もニュースもないと困るから、一つ二つは接触するけれど、あとは自分の趣味でもって千円、二千元の加入料を払つて、例えばゴルフチャンネルばかり見る、アイスホッケーのチャンネルばかり見る、そういう世界になつて行くんじゃないかと思ひます。

ルーズソックスは右へ習え現象?

司会 例えばカルト的に、他の人が殆ど知らないところへワアツと行つて、注目が集まつてそれが広がっちゃうと、また離れるということなんですかね。

橋爪 ある程度広がっちゃうと、離れるという逆の力学が働くかも知れませんが。

司会 ルーズソックスなんて、猫も杓子もやってますね。格好いい、と思つてやっていると、皆がやっているのはむしろやらないとすれば、あんなものはすぐに廃れるはずですね。ところが、相変わらずやっている。

大島 制服願望があるかもしれませんね。

司会 皆がしているものを、自分もしていないと心配だということ、人のやっていることはやりたくないという、相反する価値観のようなものが、共存しているんですかね。

ルに誰からも連絡がないと、自分が世の中から取り残されちゃつたような気分になる。そんな若者がどんどん増えていくんです。

まあ、僕も含めたオジサン世代は、そんな時代になつてとんでもないな、人間関係が希薄になつて、と嘆くわけですが、それは一種のノスタルジアかも知れないし、こういう関係を「新たな人間関係」と解釈することもできる。「フェイス トウ フェイス」が「パソ トウ パソ」に形態を代えただけであつて。

こうした現象の行きつく所は、いま増えている「閉じ込めり」現象につながるのか。一〇年も二〇年も自分の部屋に閉じこもつて、両親とも会話しないというやつ。それとも、まったく新しい人間関係が生まれつつあるのでしょうか。橋爪先輩はどう考えておられますか。

かえつて能率的/管理職もいらない

橋爪 確かに会社で隣の人と話をしたりせず、画面ばかり睨んでいるというのはちょっと変ですけど、新しい時代の仕事のやり方に適応しているとも言えるわけです。昔、村で農業をやっていた頃は声をかけ合つて皆で田植えをしていましたけれども、近代社会は、個人個人が頑張れ

ばいいわけです。ただ、それだけでは人間を管理できないから、企業トップと管理職ラインがいて組織をつくり、仕事が終わってから飲みに行ったり人間関係でうまくやっていたけれども、情報がダイレクトに往き来するようになる、トップの意思をいきなりラインに指示したり、ラインの問題点をいきなりトップに上げたりすることも出来るので、管理職がいらなくなる。これはリストラにちようどいitと思っっている経営者も多いわけです。そうなるらラインの人はお互いに話なんかしないで、画面ばかり睨んで能率よくソフトか何か開発してくれた方がいいのかも知れない。若者なりに全く違った場所に個人的な空間を持っているのかも知れないですね。いちがいには言えないですけど。

ギラギラはイヤ、つながりは欲しい

司会 そういう人間が増えてくると、人と人との付き合いが下手になって、喧嘩の仕方も分からなくなる。何か面白くないことがあると、いきなりズブツとやっちゃうみたいな、短絡的な発想も出てくるんじゃないか。オジサンの危惧かもしれません。

菅沼 まさにオジサンの危惧だと思うんですけどね。自分に理解できないから、こいつは変わった奴だ、いきなりですよね。「ベル友」であれ、携帯電話であれ、関係が密であれ疎であれ、一〇人でも二〇人でも繋がりが欲しいという、現象が同時進行しているんですよ。

司会 そうですね。その機械を持つことによつて、そういう欲求がたかまるわけですね。

片貝 Eメールもそうでしょう。誰からも入って来ないというのは寂しいもんでしょう。逆に入り過ぎることだつてあると思うんですよ。ダイレクトにコミュニケーションできると中間管理職がいらないわけですから、何百、何千人という部下が一遍にトップに企業内のイントラネットと連絡しますよね。そうすると、トップは処理出来なくなるわけです。Eメールを見る秘書を雇わなくてはならないとか、自分ではそんなに処理できる時間は無いですし、一々返事をしたための時間も無いですし、そういうことだつてありますよね。掛かってこない寂しさと掛かりすぎる繁雑さというものがあると思うんですよ、インターネットについていえば。

ネットワーク上でのつながり

司会 どちらにしても、今はまだ混乱期、という感じがしますね。やっぱり今世紀が終わつて、二〇〇一年になる



菅沼栄一郎氏

ブツ言っている。そんな人種は気味が悪い、ということにもなりかねない。

司会 そこでコミュニケーションが、断絶しちゃうわけですよ。

菅沼 コミュニケーションはやつてるんですよ。

司会 ああ、パソコンでね。

菅沼 酒をやっていたのと形態、手段が違うだけで、酒のうえでの話が「パソコンでの話」になっただけですから。

司会 それが出来ない人は、コミュニケーションが出来ないわけですね。

菅沼 酒を飲みながら話をする、相手がギラギラして、臭いし、勘弁してほしいというのわかるような気がする。ただ一方で、みんなと同じルーズソックスをはいていたい、というのは、誰かと繋がっていたいという欲求がある証拠

までは、何となく落ち着かないですね。どんな風に収斂していくんでしょうか。

橋爪 私達の世代を含めて、これまで人間は、人間関係の上で自分の存在感を確かめていた。同窓生の関係もそうだし、会社の関係もそうです。それに比べて、ベル友とかインターネットとか、ネットワークの上で誰かと繋がっているという、そういう形で自分を確認しているスタイルは、電話に近いものですね。携帯電話は文字通り電話ですけども、Eメールにせよ、そういうパソコン系の通信は、電話の延長上だと思つていいです。そういう形で遠くの誰かと繋がっているというのを頼りにしている、人間関係でもマスメディアでもないもの、そこがいま奇妙に膨らんでいるという印象がするんですよ。

司会 しかし、昔は文通というのがあったわけで、それが形を変えたものじ



逢坂剛氏

やないですかね。文通友達というのがいましたよね。会ったこともないのに、初めて出会って結婚しましたとかね。

インターネット結婚も

片貝 インターネット結婚というのがあります。

司会 あるんですか。

片貝 非常に頻繁にメールを交換していて、全部分かったら良かったから、後は会うしかないといって、会ったら良かったんで結婚したという人いますよね。

大島 情報というのは知識の広さを生むかも知れないけれども、それが知恵というものに結び付いていくのだからかということになると皆さんおっしゃっているように、画面からは体験が伝わって来ないですよ。

例えば、子供の頃の体験でトンボの尻尾を切ったり、そこにマッチ棒を突っ込んだり、あるいはトンボを捕りに山を歩いたという、自分の行動と現場から単なる知識じゃなくて、命を慈しむような感性としての知恵が育っているわけ、そういうフィーリングというのはとても大切なことだと思いませんか。だから情報としてパソコンの画面を見ているやりとりの中だけで便利になり、高速化し、知識が一気に出てくるような感じではあるけれども、それが二一世紀に広がって行く知恵の深まりに結び付いて行くだろうかという危惧はありますよ。

司会 そういう体感というのは、なかなか引き継げないんですよ。

大島 だから虫一匹殺したとこない子が人を殺すわけですよ。それは先程から言われている閉じこもりの中で、頭でつかちになって知識は沢山に持っているんだけども体験が狭い。虫も殺せない、或いは蛇も掴めない、そういう子が人を殺しちゃう。

司会 それ、オジサンの危惧に終われば、いいんですけどね。でも、大切なことは、そういうシステムに組み込まれるんじゃないかって、自分のなかにそのシステムを組み込んで行く、ということでしょう。そういう自我意識を持たないと、いつの間にかシステムに組み込まれて、ただ流されるだけになる。

自分の足で稼ぐ情報を大事に

司会 今日はかなり真面目な座談会になってしまいましたけれども、それぞれ最後にお一人ずつ、感想をお願いします。今度は逆に菅沼さんから。

菅沼 やっぱりオジサンの偏見には、捕らわれたくありません。自分もオジサンの一人なんです、いま出てきている現象は、一体どこへ向かっていくのか。インターネット大切とか、人間的な温もりとか、感性とか、何よりも家族の人間関係とかそういうものは、失われてしまうのも寂しいかなと、便利になるのはいいですけどね。基本的なところは失いたくないと思いますね。

しなやかさを深めたい

司会 大島さん、いかがですか。

大島 二〇世紀から二一世紀への過渡期で情報イノベーションが進んでいるところですけども、それじゃ二〇世紀というのはどういう時代だったのか。あえて一言で言うとハードウェアの時代で、いわば物と金と戦力と、つまり富の蓄積のために、人も国もしのぎを削った世紀だという気がするんですね。しかし、二一世紀というのは単なる富とか、物とか、金とか、軍隊の強さとか、国の大きさとか、そういうハードな尺度じゃなくて、ソフトウェアとか、そういう人の生き方とか、フィーリングとか、しなやかさとか、そうしたものを深めていかなければいけない。

二一世紀ですます問題になっていくであろう人口爆発の問題とか、この間起きた石油による海洋汚染の問題とか、それからアマゾンの熱帯雨林の砂漠化の問題だとか、南極のオゾン層の問題だとか、そういう諸々のグローバルに

ト世代が、何を考え、何を求めている、自分達とどう違うのか。冷静にウォッチングをして、その先にはまったく新しい世界が作られつつあるんだという考え方をしたいと思っています。

司会 片貝さんは、いかがですか。

片貝 火事が起きてすぐパソコンに飛び付く若い記者じゃないんですけど、営業ということを考えると、お得意さんを歩いて売り込むということをやらないで、データばっかり見ている、決して品物というのは売れないだろうし、そういうことも考えなければいけないかなと。インターネットは非常に便利なツールではあるんだけど、そればっかりでもいけない。

私の業界でいうと、テレビは確かに地上波とかCSとかじゃなくて、二一世紀はパソコンとテレビのモニターと、全部映像とか音声とか一緒になって太いパイプが出来ると思うんですね。先程言われましたオンデマンドですね。その中で面白い物も出来るだろうし、それからお医者さんとの医学的なやりとりなども出来て、自分で治療出来るかも知れないし、そういうようなもつと便利な世の中にならなくて、そういうようなもつと便利な世の中にならなくて、失ってほしくないなあと思うのは、自分の足で得る情報の

叫ばれているテーマというのは、軍隊だとか、道路だとか、港湾工事だとか、金の積み重ねだとか、そうしたものは本質的に解決できないテーマだと思うんですね。フィーリングのイノベーションというか、ソフトウェアがいつそう大切になってくる。

今、情報革命の中でコミュニケーションのハードなツールとしての通信機械が新しく生まれたということじゃなくて、その機械によって人の心がしなやかになったり、オジサン世代が持たなかったフレッシュユでボーダレスな感性、国家や民族のカベを超える感性が広がって行けば楽しい時代がきそうだなという気もしないでもないなと。

司会 そうあって欲しいですね。

文明進むと文化は衰える

大島 とかく日本人は物と金なんですよね。俗にいわれる単一民族国家の習いとして、すぐヒステリックになったり、一つの価値観にこり固まったり、物と金にこだわったりしてしまいがちです。そうではなくてソフトなフィーリングの変化みたいなものを通信革命になう若い世代に期待しているんです。オジサンとしては。

司会 そうですね。だいたい文明が発達すると文化は衰

えるというのが相場なんです。便利になって余暇が出来るも、結局その余暇をどうしてもグダグダと、無為に過ごしちゃう傾向がある。無駄なことは全部機械にやらせて、余暇のできた分を文化というか、人間の心を豊かにする方向に、役立てなければいけませんね。

それと、インターネットはさきほど橋爪さんが、理数系にはなくてはならないものだ、とおっしゃいました。なるほどとは思ったんですけども、文科系の人間にとっては何となく、インターネットをやらざる者は人に非ず、みたいなムードが感じられるんですね。そういうのではなくて、個人個人の価値観に従って使う人は使う、必要のない人は使わないで済ませる、というような選択のできる状況になつてほしいと思います。

それでは締めを、橋爪さんをお願いしたいと思います。

マラソン、ボートレース「体感」が重要に

橋爪 先進国が情報社会化していく動きは不可避で止められないと思います。最近ホームページを持ってない人をホームレスと言うらしいんですけど、私たちも気を付けなければいけない。

そうすると、さつきから現場という言葉で言われていた

とは思いますが。

司会 その訓練場として、開成の存在もようやく話題に出てきた、という感じがしますね。(一同笑い)

大島 開成についてはあまり話さず、でしたね。

司会 今日はそれが出なかつたですね。開成も確かに変わりましたが、たまに運動会なんかをのぞくと、けっこう熱気が溢れていますし、まだまだ開成の良さもたくさん残っています。そういうものを、やはり今橋爪さんがおっしゃったように、体感としてずっと引き継いでほしい、という気がします。

まとめになったかどうか分かりませんが、こんなところで宜しいでしょうかね。どうもお疲れさまでした。

一同 お疲れさまでした。

※(なお、出席者のお一人、菅原氏には、この座談会記事の編集、構成さらに最終校正まで、大変ご協力を頂きました。)

けれど、情報になる前のもの、それにどうやってアクセスするかが大事になる。どうしても情報を介してアクセスするよりないんだけど、情報になってしまった途端にそこには新しさも感動もないという、そういうことになりがちだ。そこで、ネットワークにのらない情報源、つまり体感ですね、体の感覚。これの希少価値が、逆に出てくるんです。

それで話は学校に戻りますが、学校というのはメディアアとしてみれば旧態依然たる場所なんです。要するに人間を一か所に集めて、黒板みたいなものに先生が板書するだけ。でも、休み時間にはおしゃべりをして、それからクラブ活動があつて、マラソンがあつて、ボートレースがあつて、水泳があつて、つまり体感があるんですよ。体がそこにおいて、一緒に時間と空間を共有しましたという六年間があるんですね。

情報化時代をむかえ、これをどういうふうな学校がプリシンプルを持って、体感の訓練の場として自らを位置づけるかが大切だ。受験はどうしても情報に傾いていくから、情報一色になるんですけれど、長い目で見るならば、その反対の要素をどれだけ織り込むかということに、これからの人材のキーがあるのではないかと、とても難しい事だ